

ゆずむすめ新聞

平成二十九年

六月発行

白い花の咲く頃

六月号

白い花の咲く頃

【発行所】

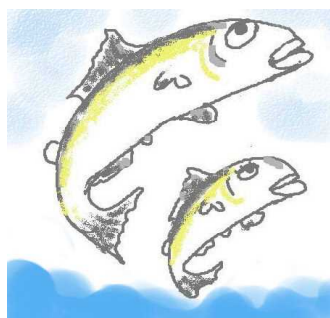
農事組合法人

古座川ゆず平井の里

和歌山県東牟婁郡

古座川町平井469

Tel 0735-77-0123



日中の暑さに比べて、まだまだ朝晩は寒いくらいです。今年は季節の動きが少しゆっくりで、つい先日茶摘みが終わり、六月を間近にして田植えも終わって、お百姓さん達もほっと一息です。

その田んぼの上をツバメ達が気持ち良さそうに飛び回っています。でもよく見るとクチバシに小さな虫をくわえてひな鳥達のもとへ運んでいる様子。ご苦労様です。

この季節の最大のイベントといえば、やはり鮎の解禁です。昔に比べ、鮎の数が減って物足らない、という声も聞かれますが、解禁日を間近にして、腕に覚えの強者どもの胸の高鳴りが聞こえてきそうです。

そして、緑深き山間の柚子の里に白い花の咲く季節が訪れました。

初夏の風に誘われて、山手の道を歩くと、すでに夕べ降った雨で柚子の花の散った後に小さな青い果実が顔をのぞかせています。「こんにちは・・・」と思わず笑顔でのぞき込んでしまいました。秋には立派な黄色い果実に成長して私達を喜ばせて下さいね。

【ゆず娘】

【新しい風が吹いた日】

その日、地域おこし協力隊の小山陽平さんと奥さまの菜保さんが仲良く来てくれました。

若い人が来てくれるという期待と、この土地を気に入ってもらえるだろうかという不安が、みんなの心の中の正直なところでしょう。

「このままでは、あかん。自分たちの地域は自分達で何とかせな。」と区長さん達が中心になって立ち上がった「七川ふるさとづくり協議会」が里親のような役割を担います。

大きな体と真っ直ぐな姿勢の彼、ショートヘアのよく笑うかわいらしい奥さま

二人は、この地域に爽やかな風を運んでくれました。来てくれてありがとう、貴方たち二人が幸せだと思えることが、一番です。

【倉岡】



左から宇田理事、下山理事、南添野川区長、津木公民館長、小山さん、小山夫人、羽山理事長

「蒸し暑い夏に

グイグイ飲みたい！」

「リリットル

「柚香ちゃん」

つい先日、田植えをしました。

手伝いにきてくれたおいちちゃん、おばちゃん達に「リリットル柚香ちゃん」を振る舞いました。

みんな「汗がすう〜と引いていく、すっきりして美味しい」と評判でした。私の鼻がちよっと高くなりました。

もちろん職場でも、三時の休憩時間に冷たく冷やした柚香ちゃんをグイグイやります。小瓶の柚香ちゃんも良いけど、「ツップでグイグイ飲む柚香ちゃん、最高！」。

「ほんまにキ

ける感じ〜」

仕事への意

きます。

もちろんジ

お〜です。



ようこそ ミツバチワールドへ

第3回：熊野蜂蜜のルーツ

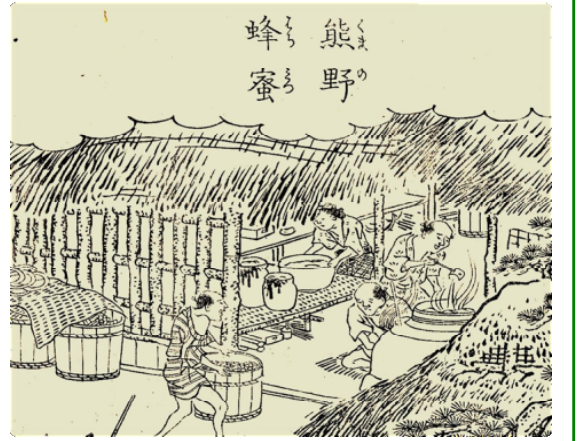
江戸時代、日本一とたたえられた蜂蜜がありました。その名も「熊野蜂蜜」。ミツバチワールド第3回は、日本の養蜂の歴史と熊野蜂蜜について紹介します。

歴史の教科書にも登場する有名な書物『日本書紀』や、長崎県対馬の儒学者・陶山訥庵が書いた『津島紀略』の記述などから、遅くとも西暦五〇〇年から六五〇年頃には日本でも養蜂が始まっていたようです。平安時代には宮中へ蜂蜜を謙譲していた記録が、また『今鏡』や『今昔物語』といった文学作品の中にも、ミツバチを飼う貴族や庶民が登場します。

江戸時代になると本格的な養蜂が各地でおこなわれるようになります。今から四百年ほど前、徳川頼宣（家康の子で吉宗の祖父）が和歌山藩主を務めた際に、ここ熊野に養蜂と製蜜を勧めたという記録が残されています。今なお幾重にも連なる深い山々に囲まれた熊野の地。領内を視察して耕作に適した平地が少ないことを目の当たりにした頼宣公は、藩財政を豊かにするために当地での養蜂を勧めたのでしよう。

それはやがて、「熊野蜂蜜」という日本一の蜂蜜ブランドを産むこととなります。一七九九年に出された『日本山海名産図会』。江戸時代の日本各地の特産品について書かれたこの本は、文章とイラストのセットで構成され、庶民にも広く読まれたそうです。この本の蜂蜜の項目には、「いろいろな地域で蜂蜜を生産しているが、紀州熊野が一番である。」という記述があります。イラストのページにも「熊野蜂蜜」と大きな文字が記され、養蜂の様子が詳細に描かれています。さらに、同時代に書かれた別の書物にも面白い記述があります。なんと、他の地域で採れた蜂蜜までもが熊野蜂蜜の名で販売されていたというのです。今という産地偽装があつたんですね！熊野の蜂蜜が、それだけ大きなブランド力を供えていた証なのでしょう。

さて、一大ブランドとなった熊野の蜂蜜ですが、今から百年前に書かれた『紀伊東牟婁郡誌』という本の中に次のような記述があります。「今から千年以上前、古座川町松根の太古（大河）では野生蜜蜂の巣から貯蜜を採取し他の生活用品と交換しており、これが太古蜜の起源である。後に人々は野生の蜂を捕えて木洞に入れ、山間で一般に飼養するようになり、ついに太古蜜の名は熊野蜜に変わり世間に広く知れ渡るようになった。」と。現在、松根大河に住む人はいませんが、熊野蜂蜜の祖「太古蜜」の心を受け継いだ蜂蜜は、平井の里をはじめ古座川町内でも生産され続けています。



資料提供：「国文学研究資料館」・「CC BY-SA 4.0」
『日本山海名産図会 卷之二』（1799年刊）の蜂蜜の項に描かれた挿絵の一部を使用

(Waku Doki サイエンス工房 揚妻芳美)

農事組合法人

古座川ゆず平井の里

第十三回 通常総会開催

五月二十日 平井区民会館において通常総会が開催されました。

羽山代表理事の挨拶に続き、来賓紹介
来賓挨拶では古座川町長 西前啓市様
東牟婁振興局 農林水産振興部長 田中常富様より、御挨拶を頂きました。

議事にはいり、十六年度業務報告において、十四年度の柚子大不作による販売縮小の影響をうけて、適正な柚子果汁の在庫を持ち安定して製造と販売ができることが重要な課題となったことについて説明と報告があり、承認を頂きました。

庶務事項においては「七川ふるさとづくり協議会」の活動と地域おこし協力隊員の報告があり、小山さんに挨拶して頂きました。

続いて十六年度の決算報告、監査報告があり、承認を頂きました。

つぎに十七年度事業計画、特に、モスフードの柚子ドリンク、販売店舗拡大について、

話し合いがもたれ、生産者の皆さんの積極的な意見を頂きました。ありがとうございました。



新生

「柚子の里の仲間達」

製造部の新しい仲間を紹介します。

大阪から越えてきて三年、佐田在住の、岡田浩希、尚代夫妻。

岡田浩希 製造ラインの組み立て、仕事の割り振り等を担う、中心的存在。穏やかな人が女子に人気です。

岡田尚代 明るくムードメーカー的存在。パウンドケーキ担当。

岩下博利 真面目で頼り甲斐のあるやさしい人柄、頼み事しやすいので頼りにしています。（谷井）

山田信子 四十代の若手、パン職人でもあり、負けず嫌いの頑張り屋さん、

山里花製造担当。フードプロセッサリーの達人。他に製造部には、川案内人では、釣り師で、写真家の田上、古株の谷井がいます。以前のやり方に固執せず、製造ラインを使用し、無理せず、多く製造できるように、意欲的に作業



のように、皆が意見を出し合い、意欲的に作業しています。

総務、発送のみんなも頑張っています。パートのお母さん達とも力を合わせ、スクラム組んで頑張ります！。

【製造部 谷井】